

畜産センター だより

顧客満足の視点

畜産センター所長 にしのひろし 西野 洋

昨年4月の定期人事異動で中丹家畜保健衛生所から赴任しました。公設試験研究機関での勤務は、府職員としての初任地であった碓高原総合牧場（当時）以来となりますが、どうぞよろしくお願ひします。

畜産経営を巡る情勢は、飼料原料価格の高止まりや円安傾向に伴う生産資材費の増、電気料金の値上げなどによる経営環境の悪化、海外、特に中国、台湾での鳥インフルエンザや口蹄疫の続発などの家畜伝染病対策、そこに先行き不透明なTPP交渉問題も加わって、一層の不安定さが増しています。

こうした中、京都府は、一昨年12月に『「元気で安全！」京のこだわり畜産アクションプラン』を公表しました。このプランでは、家畜飲用水の消毒、飼料用米等の地元産飼料の積極活用など、農場バイオセキュリティに関する府の独自基準を満たした「京のこだわり畜産農場」を登録し、これらの農場で生産された安全にこだわった京都らしい畜産物をしっかりPRして、「京づくし」のコンセプトのもとで利用拡大を図ることとしています。

畜産センターにおきましても、多くの農場が登録されて生産物の有利販売に繋がるよう、これまでの試験研究やタスクチーム活動で培ってきた技術やノウハウを、十分に発揮していきたいと考えています。

さて、このセンターだよりでもご紹介してきたとおり、畜産センターでは、畜産技術に関する試験研究を核としつつ、生産現場の課

平成26年2月
第12号

京都府農林水産技術センター
畜産センター
〒623-0221 綾部市位田町檜前
電話:0773-47-0301
fax :0773-48-0722
MAIL:ngc-chikusan@pref.kyoto.lg.jp
URL:http://www.pref.kyoto.jp/chikken/
碓高原牧場
〒627-0248 京丹後市丹後町碓1
電話:0772-76-1121
fax :0772-76-1123

題への技術的な助言・指導、酪農教育ファームとしての食育活動や体験学習、碓高原牧場における和牛振興基地と丹後の観光拠点づくりなど、時々々の社会・農業情勢の変化やニーズに呼応して、多様な業務を行ってきました。そして、最近では「生産者との協働」、「地域との連携重視」、「現場に密着した組織」を仕事を進める上でのキーワードとしてきました。

これからは、これらに「顧客満足の視点」を加えていきたいと考えています。予算や人員が限られているのも事実であり、十分にお応えできず、また、100%の満足感を得ていただけず、お叱りを受けることもあると思います。しかし、一つ一つの仕事において、顧客目線を意識することによって、新たな工夫や改善が生まれ成果物の品質が確実に良くなっていきます。顧客は、畜産農家の皆さんであり、研究成果を活用頂く皆さんであり、畜産センターや碓高原牧場に来られる多くの府民の皆さんであります。ご要望やご意見を是非お寄せいただきますようお願いいたします。



築いていこう差別のない明るい社会

乳牛の受精卵譲渡

畜産センターでは、平成4～7年度にかけて、スーパーカウ（1泌乳期に20,000kg以上の生乳を生産する高能力牛）6頭を北米から導入しました。そして能力の高い種雄牛をそれらに交配することにより牛群の改良増殖を行ってきました。平成13年からは家畜受精卵譲渡事業に基づき、当センターがけい養する高能力牛（スーパーカウ後継牛）から、生産した受精卵は全国農業協同組合連合会京都府本部を通じて年4回、四半期ごとに農業協同組合や人工授精所に譲渡しています。平成23年度は30卵、平成24年度については34卵の受精卵を譲渡しました。譲渡された受精卵は農業協同組合を通じて、府内酪農家の牛に移植されます。受胎すると300日足らずで子牛が生産され、その子牛が2歳になる頃には分娩し、生乳を生産します。

現在、当センターでは、搾乳牛はスーパーカウ4、5世を中心に約25頭、育成牛や子牛も合わせると50頭余りの牛をけい養しています。また、平成25年4月1日にはスーパーカウ7世が初めて誕生しました。

今後も生産者が希望する改良に見合った種雄牛を選抜し、受精卵を生産することで、府内酪農家の畜産経営の安定と向上を図っていきます。



おいしい牛肉の生産

～牛のビタミン分析～

日本人は、明治時代以前から「滋養」を高める薬用としての効能から牛肉が食べられていました。しかし、庶民が普段口にできるようになったのは明治維新以後の文明開化によることが一般的とされています。

現在では、全国に様々なブランド銘柄の牛肉が流通しています。テレビなどのメディアでも牛肉の品質を示すA5ランクなどの肉質等級を見聞きするようになり、おいしさを追求する日本人のこだわりが感じられます。それでは、おいしさを生み出す生産農家（肥育農家）は、どのように牛を育てているのでしょうか。

まず、農家は肥育の素（もと）となる子牛を競り市で購入します。京都府でも年5回、

福知山の中丹家畜市場で開催されます。競り市に出品される子牛はおおよそ9か月の子牛で、各肥育農家が大きさや血統から判断して競り落とします。

肥育農家に引きとられた子牛は、約30か月齢になるまで飼育し、と畜場を経てお肉屋さんなどに販売されます。当初の子牛は300kg程ですが、出荷される時には大きいもので900kg位にまで達します。

しかし、そのような大きさに仕上げるまで、単純にエサを食べさせて太らせれば良いというわけではありません。そこには各肥育農家のこだわりや技術が垣間見えます。

肉は肥育する過程で大きくなる部位が異なります。また、大きくするには骨を成長させなければなりません。そしてロースの太さや、皮下脂肪が厚くなる時期はそれぞれ異なっています。骨（フレーム）を大きくし、肉をつけ、脂肪の薄い牛を作ることが理想です。

そして、なによりもおいしさを左右する脂肪交雑（一般的にサシや霜降り）ができる時期は最も重要です。近年、ビタミンAと脂肪交雑が深く関係していることが知られてきました。ビタミンAは肥育初期では骨などを発育させるため多く給与します。しかし、一転、肥育中期である14か月齢から24か月齢にはビタミンAの給与を抑制することで、脂肪交雑が高まります。一步間違えれば、牛の体調を損なったり、病気になったりしますが、肥育農家の細かな目配りや技術がそれを防いでいます。

そのような取り組みの中、畜産センターでは府内肥育農家の依頼を受け、定期的に肥育期間の異なる牛群や牛個体の血液中のビタミンA濃度を、年間延べ1,000件以上モニタリング調査しています。この結果を基に、各管内の家畜保健衛生所と畜産センターが分析し、農家が肥育期間中どのように飼養管理すべきか、飼養管理しているかが判明します。

このような各肥育農家の丹念な努力が実って、おいしい牛肉ができあがり、お肉屋さんなどに並びます。京都府にも京都肉や亀岡牛など、他県のブランドに勝るとも劣らない銘柄牛が生産されています。地産地消の観点からも一度ご賞味ください。きっと、灯台下暗しだったと気づかれると思います。

畜産センターにおける衛生対策

～衛生管理区域の内と外を明確にして

病原体の侵入を防止～

平成 22 年度、宮崎県で口蹄疫、全国各地で高病原性鳥インフルエンザが発生したのを受けて、平成 23 年に家畜伝染病予防法の一部が改正され、家畜の所有者が守るべき「飼養衛生管理基準」も大きく見直されました。

飼養衛生管理基準には罰則規定もあり、また、守らないで口蹄疫などの家畜伝染病が発生した場合、国からの手当金が減額されるという厳しいものです。しかし何よりも家畜伝染病が発生すると、その農場だけでなく地域や日本の畜産に大きな被害をもたらすことにもなりかねません。

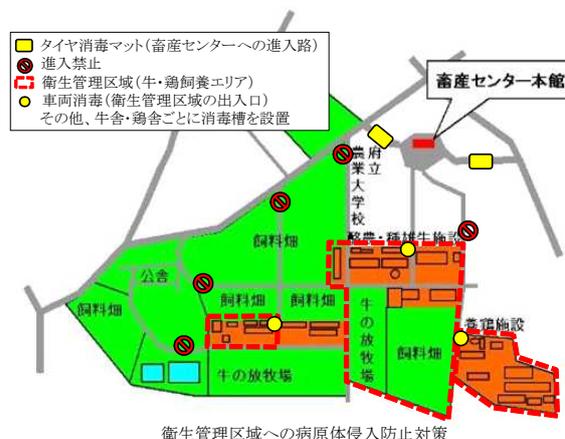
当センターでも試験研究などを目的に牛、鶏を飼養しているため、畜産農家の皆様と同様、飼養衛生管理基準を守る必要があります。その中でも「衛生管理区域」を設けてその内と外を明確にし、病原体を侵入させないことが最も重要と考えます。特に当センターは職員や畜産関係者の来所が多く、更に酪農教育ファームなど活動により多くの府民の方も来所されることから、一般の畜産農家以上に注意が必要となるため、病原体の侵入防止に重点を置いて、以下のような対策を実施しています。

- ①当センター敷地（農業大学校を含む）への車両進入路を2か所に限定し、タイヤ消毒用マットを設置
- ②衛生管理区域（牛・鶏飼養エリア）への立入者を制限するとともに、出入口を1か所に限定し、車両消毒を実施
- ③牛舎・鶏舎ごとに消毒槽を設置し、立入者の靴底消毒を実施。消毒液は汚れていなくても定期的に交換
- ④酪農教育ファームの体験参加者などが衛生管理区域で牛や施設に触れる場合には、手指の洗浄・消毒と靴底消毒を徹底

表 「たちすずか」の育成地での成績（平成 19～21 年）

| 品 種 | 出穂期 (月・日) | 稈長 (cm) | 全乾物重 (kg/a) | 茎葉重 (kg/a) | 籾重 (kg/a) | 黄熟期の糖 含量 (%) | 耐倒伏性 |
|-------|--------------|------------|----------------|---------------|--------------|-----------------|------|
| たちすずか | 9.02 | 121 | 187 | 164 | 23 | 10.1 | 極強 |
| クサノホシ | 8.29 | 110 | 178 | 106 | 72 | 1.7 | やや強 |

衛生管理区域への病原体侵入防止は農場の作業動線などによって違ってきますので、皆様も家畜保健衛生所に相談して、それぞれの農場にあった対策に取り組みましょう。



衛生管理区域への病原体侵入防止対策

飼料稲に新タイプの品種群登場！

京都府での飼料稲の作付面積は平成 18 年が 7 ha、平成 21 年が 17ha、平成 24 年が 117ha、と年々増加していますが、牛への利用は、平成 18 年が 5 ha、平成 21 年が 8 ha、平成 24 年が 22ha であり、増加は緩やかです。

その理由は、新たな収穫機械の導入が必要なほかに、ホールクロップサイレージにしても籾（モミ）の消化性が悪いために思ったほどの栄養価がないということです。

最近、消化性が改善された稲発酵粗飼料用品種「たちすずか」が育成されたので、紹介します。

極短穂の「たちすずか」は主に以下の特徴を持っています。

- ①出穂が「クサノホシ」より 4 日程度遅い極晩生品種
- ②牛にとって消化の悪い籾が「クサノホシ」の 3 分の 1 程度と少なくその分消化性の良い茎葉の割合が高い。
- ③糖含量がクサノホシより多く、発酵に適している。
- ④耐倒伏性が” 極強 ” で、収穫適期を過ぎても倒れにくい。
- ⑤現在増殖中で平成 26 年から配布

予定です。

なお、「たちすずか」と極短穂の同系品種で「たちあやか」（出穂が日本晴に近く、「たちすずか」より約半月早い中生品種）が育成されていますが、こちらの一般利用はもう少し早く先になります。

飼料作物栽培の相談はお気軽に畜産センターへ

牛への飼料用米給与拡大を目指して

京都府では、飼料用米栽培面積が平成 24 年度に 92 ha まで増加し、主に採卵鶏で給与されています。さらなる飼料用米の栽培面積拡大と牛などへの給与拡大を目指し、栽培のポイントをまとめた飼料用米栽培マニュアルを作成するとともに、搾乳牛への給与実証を行いました。また、肉用繁殖牛、肥育牛への給与実証も実施中です。

給与実証では、トウモロコシなどの濃厚飼料の 2 割を飼料用米に置き換えました。与えた飼料用米は、①稲刈り直後の未乾燥粳米をサイレージ調製したもの（粳米サイレージ）、②乾燥し、粳殻ごと破碎したもの（破碎粳米）、③玄米を破碎したもの（破碎玄米）

表 飼料用米給与実証試験の成績

| 飼料用米調製の区分 | 原物換算量 | | 乳量 | | 乳成分 | |
|--------------|-------|------|------|------|-----|---|
| | kg/日 | kg/日 | kg | % | kg | % |
| 試験1(粳米サイレージ) | 61.46 | 32.2 | 5.05 | 3.54 | | |
| 対照区 | 60.25 | 32.9 | 4.85 | 3.49 | | |
| 試験2(破碎粳米) | 55.3 | 30.4 | 4.56 | 3.36 | | |
| 試験2(破碎玄米) | 56.0 | 31.7 | 4.69 | 3.42 | | |
| 対照区 | 56.8 | 31.7 | 4.69 | 3.37 | | |

対照区は畜産センターの慣行給与飼料給与量と実証は、慣行給与の濃厚飼料の2割を飼料用米に置き換え

の3種類で、飼料摂取量、乳量、乳成分に差はなく、当センターの慣行給与と変わらない成績でした。

TMR 給与の場合、粳米サイレージや破碎したものが利用でき、分離給与の場合、破碎したものを濃厚飼料と混合し給与が可能です。

粳米は、タンパク含量がトウモロコシに比べ1割程度低いことに留意する必要がありますが、輸入飼料の高騰が続く中、京都の水田で栽培される飼料用米を活用することで、生産費の低減と京都産牛乳の付加価値を高め差別化が期待できます。

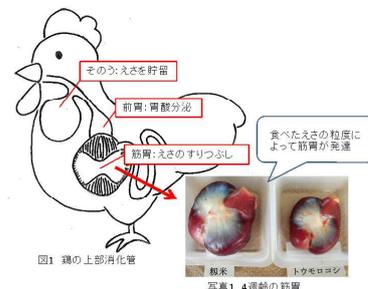
飼料用米栽培のことが一目でわかるマニュアルを水稻農家に配布



カンピロバクターによる食中毒のリスクを低減する粳米を

菌がない鶏は、食べたえさを一旦そのうに蓄え、前胃で胃酸と混合し、筋胃ですりつぶします(図 1)。ブロイラー飼料に粗大粒子の穀類(粳米、全粒小麦、玄米)や粉碎トウモロコシを

65%添加給与すると、筋胃で粗大粒子をすりつぶすため筋胃が活発に働き、発達しますが、中でも粳米給与は筋胃の肥大が顕著でした(写真1、表1)。筋胃内の pH は 2~3 と低く、口から侵入した細菌は胃酸と確実に接触すれば殺菌



できると考えられます。そこで、粳米を給与していた4週齢のブロイラーに試験的にカンピロバクターを経口接種したところ、感染抑制効果を確認しました(表2)。以上のことから、粳米という粗大粒子を給与することで、筋胃でのすりつぶしの過程で胃酸とカンピロバクターが殺菌され、ブロイラーへの感染を抑制できたと推察されます。今後は、適切な粳米の給与量や生産への影響について検討し、早期の普及を目指します。

表1 筋胃の体重比と内容物pH(4週齢)

| 区 | 体重比(%) | 内容物のpH |
|--------|---------|---------|
| 粳米 | 2.6±0.4 | 3.0±0.3 |
| 全粒小麦 | 2.1±0.1 | 3.1±0.3 |
| 玄米 | 1.6±0.2 | 3.2±0.7 |
| トウモロコシ | 1.6±0.1 | 3.0±0.1 |

表2 感染試験後のカンピロバクター感染率

| 区 | 感染率(%)(感染個体/n) |
|--------|----------------|
| 粳米 | 0,(0/6) |
| トウモロコシ | 83.3,(5/6) |

接種菌量は1羽当たり10⁴個

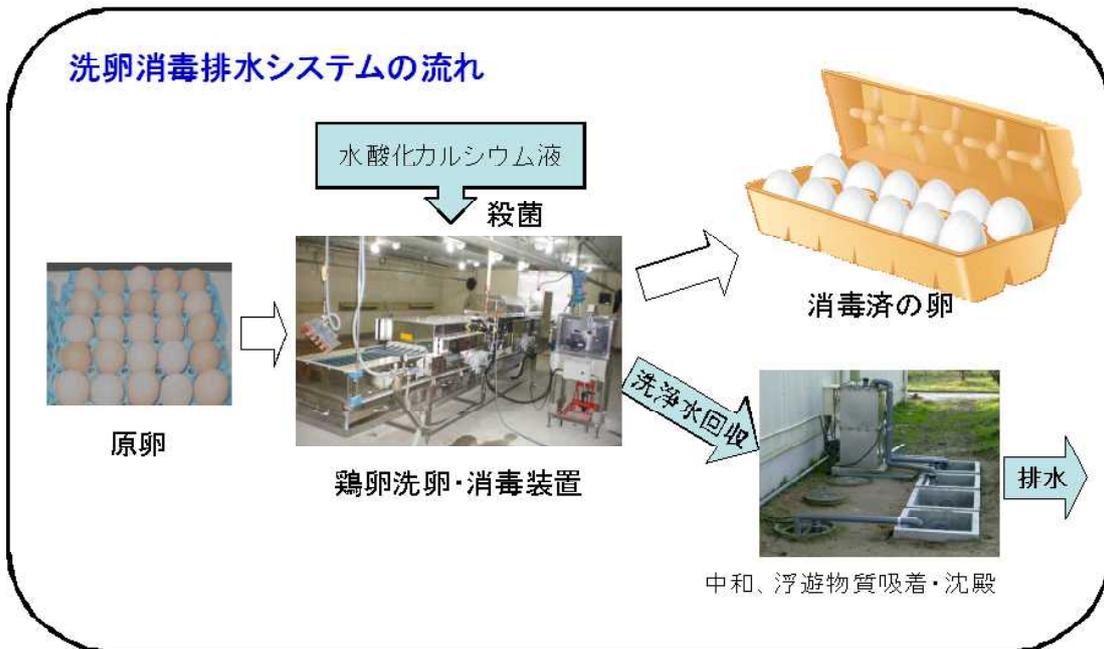
接種菌量は1羽当たり10⁴個

環境負荷の少ない

低コスト鶏卵洗浄システムの開発

養鶏場で生産された卵は、通常、卵選別包装施設で 150ppm の次亜塩素酸ナトリウム液で洗浄・消毒をしていますが、洗卵排水は高濃度の次亜鉛素酸ナトリウムを含むため、一般的な活性汚泥法では微生物群が死んでしまい、浄化は難しくなります。

そこで、当センターでは次亜塩素酸ナトリウムに変えて、殺菌剤に 0.2%水酸化カルシ



ウム懸濁液を用い、洗卵・消毒・殺菌から排水の浄化まで行うことのできる装置を開発しました。この装置を用いて、大腸菌やサルモネラに対する殺菌能力や、卵質への影響について調べたところ、通常行われている150ppm 次亜鉛素酸ナトリウムと同じ殺菌能力があり、卵殻へのダメージは次亜鉛素酸ナトリウムより少なく、鮮度を保てること分かりました。また、洗卵後の排水は水質の面でも環境への不可が少ないことも確認でき、鶏卵にも水系環境にも負荷の少ないシステムであることが分かりました。

高病性鳥インフルエンザウイルスの不活化処理装置の開発

養鶏農場において高病原性鳥インフルエンザが発生した場合には、「高病原性鳥インフルエンザに関する特定家畜伝染病防疫指針」に基づいて、発生農場等での防疫措置が行われることになっていますが、野外に生息する野鳥など



ユニック車で積み下ろし作業

が感染した場合、とりわけ、発見場所が水域の場合には、生息する生物への影響を避けるため、薬剤散布等の対策がとれません。そこで、ウイルスに汚染している可能性のある環境水を消毒する装置（以下装置）を京都産業大学と京都市南区の民間企業で共同開発しました。



装置外観

この装置は、4 tのユニック車で搬送でき、インフルエンザに感染した野鳥が発見された水域の畔に設置して、消毒対象水を汲み上げ、汲み上げた水を水酸化カルシウムで殺菌し、炭酸ガスで中和して水域に戻す操作を、連続して行います。装置は、自動運転が可能で、1日当たり 20 トンの水を処理する能力を有しています。

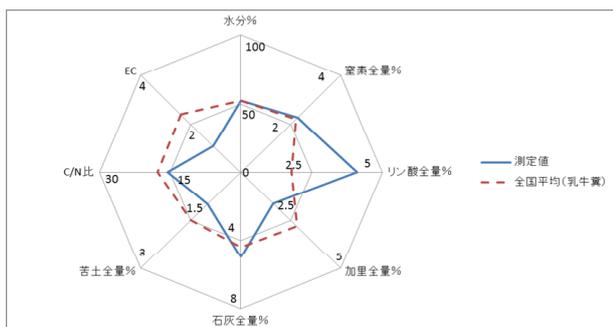
ホームページ「京都府土づくりネットワーク」の公開

府内で生産されている畜産堆肥の情報をホームページ「京都府土づくりネットワーク」で公開しています。府内の畜産堆肥の製造方法や販売方法などをはじめ、堆肥成分を全国

平均と比較したレーダーグラフを掲載していますので、ぜひ一度ご覧下さい。施肥設計の目安として利用していただくことができます。

「京都府土づくりネットワーク」：農林水産技術センター畜産センターホームページ内

URL：<http://www.pref.kyoto.jp/chikken/taihi-network.html>



堆肥成分表示の一例

九州から導入した改良基礎雌牛の受精卵を活用してください

碓牧場では平成7年度以降、和牛の主産地である九州から改良基礎雌牛を導入しており、現在約60頭が供卵牛として活躍中です。平成14年度から産次間採胚方式（妊娠一分娩一採胚を繰り返す方式）を採用し、安定的な受精卵採取にもつとめています。

また、昨年4月には鹿児島県から8頭の改良基礎雌牛を導入し、現在育成中です。血統は「隆之国」7頭、「福華1」1頭で表のとおりです。これらの牛は、11月から採胚を開始し、本年度第4四半期に譲渡していますので、積極的な活用をお願いします。

平成25年度導入牛一覧

| 牧場No. | 名号 | 生年月日 | 父 | 母の父 | 祖母の父 | 母得点 |
|-------|------|----------|-----|-----|------|------|
| 139 | あゆみ | H24.7.2 | 隆之国 | 安福久 | 金 幸 | 85.0 |
| 140 | おりひめ | H24.7.7 | 隆之国 | 百合茂 | 安福久 | 82.6 |
| 141 | ゆりこ | H24.7.12 | 隆之国 | 勝忠平 | 平茂勝 | 85.7 |
| 142 | ともみ | H24.7.25 | 隆之国 | 百合茂 | 金 幸 | 81.0 |
| 143 | あけみ | H24.8.5 | 隆之国 | 百合茂 | 金 幸 | 83.2 |
| 144 | みえこ | H24.8.9 | 隆之国 | 勝忠平 | 金 幸 | 83.4 |
| 145 | れいな | H24.8.10 | 福華1 | 百合茂 | 安福久 | 82.3 |
| 146 | のりか2 | H24.8.13 | 隆之国 | 安福久 | 平茂勝 | 83.4 |

碓高原の見どころ

丹後と和牛の歴史

浦島伝説発祥の宇良神社によると、今から約1600年前の5世紀には、現在の京丹後市丹後町宇川や与謝郡伊根町筒川では多くの牛が飼われていたと伝えられています。

また、丹後国一の宮 元伊勢籠神社（宮津市）の伝承では、約1000年前の11世紀には京丹後市丹後町袖志で子牛市（文殊市）が開催され、穴文殊にはその石碑も建てられています。

さらに、竹野郡弥栄町史には、丹後つる牛^{*}の由来が記され、宇川牛改良の始祖の一人として、袖志の権九郎翁の名が挙げられています。

初代権九郎の碑

その宇川牛の始祖とされる権九郎を顕彰する石碑が、碓高原牧場の西端に建立されています。

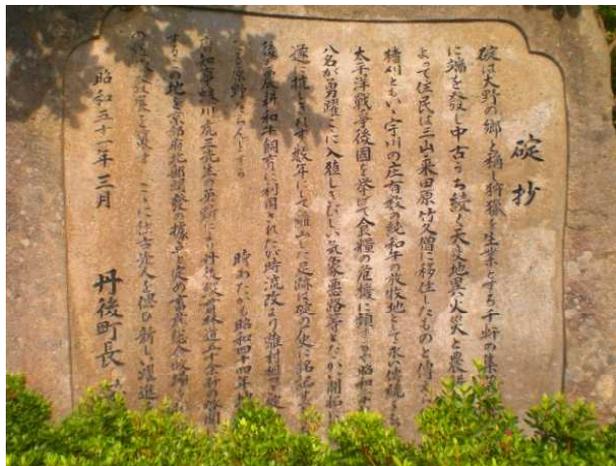


そして、初代権九郎の石碑の近くには碓高原とその由来を記した碓抄の石碑も建立されています。



碓高原と碓抄の碑

碓抄には、大野郷として狩猟を生業とする集落に端を発し、「猪狩」とも言われ、和牛の放牧地として永く活用されてきた碓の歴史が刻まれています。



ご家族連れで碓高原や家畜とのふれあい広場へお立ち寄りの際は、是非一度ご覧になってください。

※西日本の和牛生産地帯で古くから用いられている言葉で、体型や能力に優れた特徴を有し、かつその形質を確実に子孫に遺伝する優良系統を“蔓”と呼び、その系統に属する個体をつる牛と呼んでいる。

酪農家を訪ねて

今回は、京丹後市網野町にある野村牧場を訪問しました。牧場の歴史は昭和 25 年、先代が開拓入植したことが始まりだそうです。

現在は成牛 97 頭、育成牛は自家育成 30 頭、北海道預託 47 頭の規模で、周辺の国営農地 2 か所約 40 h a でスーダングラスとイタリアンライグラスを栽培し、粗飼料の 80 % を自給した土地に根ざした酪農経営をされています。

飼料給与は、TMR 方式で、季節に合わせて、重曹・カルシウムなどを調整し、牛のコンディションに合わせた給与となっています。

また、牛群の改良は、牛群検定成績や海外の種雄牛情報を活用するとともに、北海道の農家等との情報交換を行い、受精卵移植も活用しながら進められており、昨年度は、府県の乳量ランキングに

7 頭の牛が入り、牛群平均で 11,000kg を超える高い能力の牛群となっています。

今後の目標として、「牛群のさらなる改良のため新しいゲノム解析を取り入れた具体的な形質の改良に直結する新しい交配にチャレンジするとともに、自給飼料の質の向上を図っていきたい。」とのことでした。

35 年前、アメリカへの酪農留学前に、体調を壊されたことから、留学を断



念し実家の経営に携われた野村さんですが、「自分で改良を考え、交配し、生まれた子牛が思い描いていた牛に育ったときに酪農の醍醐味を感じる」との言葉が、まさに牛飼いの基本だと心に残りました。

平成 21 年度から、新たに加工部門としてアイスクリーム工房を立ち上げられ牧場横の工房と府内 2 か所で販売をされています。酪農を基本にした 6 次産業化を積極的に進められる野村牧場に注目したいと思います。（佐々木 記）

和牛繁殖農家を訪ねて

今回は、京丹後市網野町生野内で和牛繁殖・肥育経営を営んでいる農事組合法人 日本海牧場を訪問しました。当日は生憎の雨でしたが、牧場のチームリーダーを務める前田さんに牧場経営に懸ける思いを熱く語っていただきました。

現在、日本海牧場では 2 人のスタッフで繁殖雌牛を約 50 頭飼育し、子牛を年間 30 ~ 35 頭、肥育牛を年間約 50 頭出荷しています。

前田さんによれば、「過去の繁殖成績はあまり良くなかったが、最近は努力の甲斐あって、分娩間隔は短くなって、今後は、1 年 1 産を目指すとともに、九州（宮崎）の優良血

統の生産牛を自家保留して繁殖雌牛を増やし、せり市への子牛出荷頭数や肥育牛の出荷頭数を増やしていきたい。」とのことでした。

「生産した子牛については、飼養管理方法を見直すことで発育成績の向上が可能だ。」と話されており、優良な子牛を多く出荷して、肉用牛の生産頭数が減少している京都府の畜産を支えていきたいとの意気込みが強く感じられました。



スタッフの渡辺さん

また、粗飼料を地産地消することで荒廃農地対策を進め、安全な畜産物を生産・供給していきたいとの思いから、丹後国営農地でイタリアンライグラスやソルガム等を8 ha栽培し給与しています。今年からはWC S用の飼料用稲が2 ha加わり、さらに粗飼料自給率が向上するそうです。

最後に、将来は粗飼料自給率7割を目指しているので、京都府に粗飼料栽培について指導してもらいたいとの要望を受けました。

(松下 記)

養鶏農家を訪ねて

京都市西大路田町の大通りから少し上がった住宅地街の中に、歴史ある孵化場があります。

今回は、府内で数軒しかない孵化場のひとつ佐藤孵化場を訪ねました。

歴史は明治の始めまでさかのぼり、名古屋で養鶏業を営んでおられた佐藤家が、かねてより取引のあった京都の地に養鶏場を開場されました。当初は卵や鶏肉の生産もされていましたが、先代から取り扱う鶏種を増やし孵化場一本で経営されることになりました。

孵化場から約13 km離れた西京区の種鶏場には、京地どり、ゴールデンネック、横斑ブリマスロック、白色レグホーンの4種類の種鶏が500羽ほど飼養されています。ここで生産された種卵を孵化場に持ち帰り、京地どりを中心に毎月、約1,300羽前後のヒナが出荷されています。また雛とは別に有精卵も販売されており、その一部は様々なウイルス病の

検査に利用するため、毎月、京都府内の検査機関に送られています。

種鶏の管理、種卵の選別、雛の育成と作業は多岐にわたり、佐藤禎晃さんが中心となり、お母様と2人で、「良い雛を生産したい」との思いを持ちながら日々きめ細かい管理に努められています。

先々代から孵化場に設置された大型の孵卵器は、自ら点検修理されるとのことで、現役で稼働しています。中からピョピョとひよこの声が聞こえ、重々しくも暖かみのあるその佇まいに、長い歴史を感じました。

府内唯一の京地どりの孵化場として今後もかんばっていただきたいと思います。

(上羽 記)



編集後記

新しい年が始まりました。今年はいま年ですが、「午」は「忤」（ご：「つきあたる」「さからう」の意味）で、草木の成長が極限を過ぎ、衰えの兆しを見せ始めた状態を表しているとされています。後に、覚え易くするために動物の馬が割り当てられました。

馬は「物事が”うま”くいく」「幸運が駆け込んでくる」などといわれる縁起のいい動物です。また、ウマを逆さにするとマウ=舞うという言葉に繋がり、縁起が良いのだそうです。皆様にとっても縁起の良い年であることをお祈りするとともに、その一助となりますよう、一年に一度お届けする「畜産センターだより」をお送りします。

